

かわら版 育種の波動

全国新品種育成者の会発行

友人にも声をかけ、ふるってご参加ください

10月20日、育種セミナーを開催

10月20日(水)15時より育種セミナー(講演会)をオンライン開催します。会員でない方の参加も自由ですので、お知り合いの方にも呼び掛けて、ご参加ください。講師は、山形県西村山郡大江村でスモモの育種と新規就農者の受け入れ・育成等に取り組む渡辺誠一さん(平成30年度全国優良経営体表彰(担い手部門)農林水産大臣賞、平成2年度育種功労賞を受賞)にお願いしました。講演のテーマは、「異なる熟期のスモモ新品種の育成・販売による地域農業活性化の取組み」です。多くの皆様に参加いただきますようお願いいたします。

金澤相談役、竹下選考委員が出演

し、

育種の現状を語る

TBS テレビ 新・情報7days

ニュースキャスター 9月18日

(土) BS 情報7days

TBS テレビで9月18日(土)夜10時から行われたビートたけし、安住紳一郎によるニュース番組、新・情報7days ニュースキャスターでは、品種改良問題が取り上げられ、当会の金澤相談役、竹下選考委員が出演しました。

そこでは、9/1~15の日照時間が20年ぶりの記録的短さとなり、レタス、白菜が例年の倍以上になるなどの価格高騰が起きていることが報告され、暑さ・寒さに強いもの、味や食感によいものなどを生み出す品種改良が取り上げられました。粒が巨大なブドウ、皮と果肉が紫のジャガイモ、種のないピーマン、スジ取りが不要なサヤエンドウ等が紹介され、ブドウの育種では2品種を交配して採れた種から木を育てるのに5年、育成法の研究を含めると少なくとも10年がかかり、シャインマスカットは育成までに33年の年月がかかったとの説明がありました。その後15年かけてラズベリーを開発した金澤さんが登場し、番組スタッフの質問に対し、「日本では育種は儲からず、育種だけで食べている人は一握り程しかない」ことが話され、最後に登場した竹下さんが「これまで日本で

は、育種家として食べていくことは困難だったが、今年育

成した品種を勝手に増やすこと、海外に持ち出すこと等を防ぐために種苗法改正が行われたこともあり、育種に追い風が吹いているので、これからは希望者が育種に安心して参加できるような時代が来ると思う」と語られました。

「フロリアード2022」に出品希望の皆様へ

明年4月14日~179日間にわたって、オランダアルメーレ市で開催されるアルメーレ国際園芸博覧会(フロリアード2022)事務局から、コンテスト及びPR用花材の出品について当会の会員に通知してほしいとの依頼がありました。コンテストの募集期間は、9月13日~10月9日(出品状況で期間延長の場合あり)となっています。出品を希望される方は、案内書、出品申請書の様式等の資料がお渡しますので、事務局にお申し出ください。



訃報

小林五郎(元全国普及協会会長、育種賞選考委員)

享年87歳 病氣療養中でしたが、8月21日に

永眠されました。

細金裕(シクラメン、クレマチス等を育種)

享年60歳 病氣療養中でしたが、9月22日に

永眠されました。

工藤茂道(マタタビ、サルナシ等を育種)

8月に永眠されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。



わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話言葉で作成しています

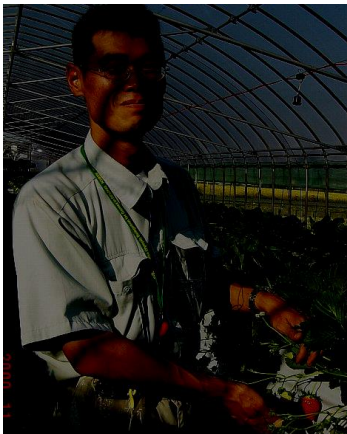
農業改良普及員からイチゴ農家に転身

「みくのか」「新みくのか」の
2品種を育成、自宅直売所で販売

水野賢治：名古屋から約20キロ北、犬山市の西に位置し、桜の名所となっている五条川が南北に貫く愛知県丹羽郡大口町で、イチゴを生産している水野賢治です。平成3年に東京農工大学農学部を卒業した私は、愛知県庁に入りましたが、農業現場に係りたいと農業改良普及員となり、トマト、キャベツ、ねぎ等の栽培農家を担当しました。平成16年にイチ

ゴ農家の担当になったことで、イチゴの高設ベンチ栽培の魅力に目覚め、自分も脱サラしてやりたいという思いを強く持ちました。家族が納得してくれない中、助け舟を出してくれたのは父でした。「そんなにやりたいなら、自分でやってみろ」と、父は100㎡のビニールハウスを建ててくれたんです。そのハウスに自作の高設ベンチを設置して、庭で育てた「章姫」と愛知県が育成した「ゆめのか」600本の苗を植えてイチゴ栽培に取り組みました。栽培したイチゴは1年目に50万、2年目に70万の売り上げとなり、家族の理解が得られて私は平成21年に退職して就農することができたのです。

育種を始めたのは、就農した年にJA愛知経済連の研修会で再会したあるJAの営農指導員から、品種改良を勧められたのがきっかけです。そのときは、できるわけがないと思いましたが、翌年「これを組み合わせればいい品種ができる」とその営農指導員が3系統の試験品種を我が家に持ってきたことから、ひょっとしたらという気が起き、ネットでイチゴの育種方法を調べ、3年程3系統を交配しました。持ってこられた3系統からは良いものが見られませんでした。私が栽培していた「ゆめのか」を花粉親とした系統から「ゆめのか」より花芽分化がやや早く、酸味が少ない高糖度系統が数系統見つかり、そこから選抜した新品種に「みくのか」の名をつけ、登録出願し、平成29年に品種登録を受けることができました。更に収量性は劣るものの「みくのか」より収穫期が7～10日早く、より高糖度の新品種「新みくのか」を育成し、現在登録に向けて審査が行われています。



「みくのか」は果実が比較的硬くて輸送や収穫調整

時のロスが少なく、うどんこ病や炭疽病に強く、ランナーも旺盛に発生し、多収なのが特徴です。「新みくのか」は、「みくのか」に比べてうどんこ病にはやや罹病しやすく、収量性も劣るが、収穫開始時期が早く、高糖度で食味の良いのが特徴です。

現在、生産したイチゴは、ほとんどを自宅の直売所で売り切っています。一般のお客様がほとんどですが、ケーキ店、パン屋、喫茶店、和菓子店の数店が利用してくれています。「スーパー等のものより新鮮で日持ちもするし、味も良い」と言ってくれる方がリピーターとして定着してくれたおかげで直売で売り切れるようになり、うれしく思っています。妻と2人で栽培面積も800㎡と小規模ですが、年間収穫パック2万パック(1パック約300g)、オリジナル品種の特性を活かした高価格で販売させてもらっています。本年11月には県から「農業経営士」の認定もいただく予定です。



みくのか

昨シーズン「みくのか」「新みくのか」ともそれぞれ別の種苗会社に商品化に向けた試作を実施してもらいました。「新みくのか」については、家庭菜園用を前提にした試作であり良い評価は得られませんでした。が、「みくのか」については、次シーズンに長崎他4県の

「ゆめのか」生産者で拡大試作が予定されています。今後も、体力と気力が続くうちは自身の育成品種を作り続け、その生産販売を通じて「地域にビタミン」を提供し続けていきたいと思っています。

自宅の直売所では、イチゴだけでなく自分で作ったハチミツも販売しています。退職して3年目頃イチゴの交配用に使っていた巣箱から自然分蜂が起きて、その蜂球をつかまえて飼いだしたことがきっかけで、私は4年前から本格的な養蜂を始めたのです。私の養蜂は、10群前後をハチミツ用に、交配用に3群をイチゴのビニールハウスの近くで飼っています。イチゴ作りと繁忙期が重なるので、春～夏の間に貯めさせた桜やレンゲ等のいろんな花の蜜が濃縮された「百花蜜」を7月下旬～8月、イチゴの苗づくりの間の隙間に採蜜してビン詰めをしています。お客様に購入いただくとともに、私自身もお世話になった方々等への贈り物としても重宝しています。趣味として小規模

に行っている養蜂ですが、今後も、近所迷惑とならぬよう群数の増やしすぎに注意しながら、イチゴと一緒に年間100キロ位のハチミツを販売していけたらと考えています。

生産組合を作り、全国の公園、観光地等に

植栽する植木を生産

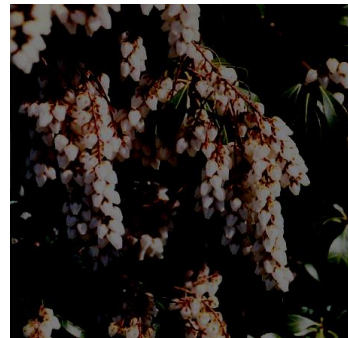
「生育が良く、開花しても樹勢が衰えないアセビ」の新品種を育成

山口耕一：福岡県の南部にある八女市星野村で、アセビ、久留米つつじ、サツキ等を生産している山口耕一です。標高が高く人口密度が低い星野村は、星がきれいで「星のふるさと」として、また玉露の最高品質茶の産地としても有名で、市の施設として素晴らしい「お茶の文化館」があることでも知られています。我が家も玉露の生産農家でした。

植物が好きだった私は、16歳で熊本県の農業研

で、各地の公園、公的施設やその周囲、自治体が整備した名所旧跡や観光地等です。

久留米つつじは、挿し木後4年目のものが出荷されます。その人気は高かったのですが、耐寒性が不足して東京より北の地域では生育が困難です。同じつつじ科で地域に自生があるアセビに着目し、昭和40年頃から販売を始めました。私たちは、自然木のアセビを挿し木し、1年かけて苗を作り、畑に植えて3年したものを出荷しました。田主丸町の4か所の卸業者には、夏の暑さに弱い樹種なので、東京以北の工事現場に植栽してもらうとともに、北陸、北関東、東北等の植栽現場を視察して、生育良好な場所を販路にするようお願いしてきました。しかし、昭和40年代の末頃から、「花はきれいだが、生育が悪く枯れるものが多い」と工事現場から、指摘されるようになりました。アセビは、花を咲かせると樹勢が衰え、花も3年に1度位しか咲かなくなってしまうのです。そんな声が各地から聞こえてくるにつれ、このままでは公共工事の植栽から外されてしまうとの思いが強くなってきました。そのような中で、私は昭和60年頃から山林原野を歩き回り、自然交配した強健そうな



究家・教育者、松田喜一が昭和3年に熊本県八代市の干拓地に開いた日本初の民間農業実修所である日本農友会実習所に入り、2年間住み込みで畜産・園芸・果樹などの農業全般を学びました。卒業して、しばらくは我が家で玉露茶の生産を手伝っていましたが、20歳になった頃、星野村の北側にある田主丸町の植木の卸業者で働き、植木の知識を学びました。そこでは、人気のあった久留米つつじ等の植木が全国の公共工事の現場などに販売されていました。昭和30年代になると、急激な経済発展により、公害問題が顕在化してきたことから、年と共に工場緑化推進が活発となりました。昭和39年の東京オリンピックに向けて植木の生産が好調に動いていた昭和38年、私は田主丸町の卸業者が販売する植木の生産を始めました。私一人の生産では注文に応えられないことから、一緒にやろうと20人ほどの仲間を集め、生産組合を作って各人が育てた植木を組合に集めて、トラックに積み込んで田主丸町に出荷しました。これといった仕事もない時代だったので、植木に需要があることを話すやってみようという人がいたので良かったです。公共工事に使われるもの主体

個体を選び、そのアセビの穂を20系統程採ってきて挿し木し、育て始めました。その中から「挿し木の活着とその後の生育が良く、病害に強く、樹勢が衰えないもの」を選抜し、「星野紅」の名称で昭和63年に出願し、平成6年に品種登録を受けることができました。アセビの開花期間は、4月下旬から3週間ほど、関東では5月下旬から開花が始まります。「星野紅」は毎年白い花を咲かせ、秋の紅葉期から翌年3月までの花の蕾は紅色に染まり、とてもきれいです。



アセビ「星野紅」

アセビ圃場の山口さん

多くが公共事業の現場に植栽される植木の販売は、緑化が活発に推進された昭和40年代頃から好調で

したが、バブルが崩壊し小泉内閣が国債の発行を30兆円に抑えると発言したことから受注が減り、更に民主党政権になって急速に減少しました。政権が自民党に戻り、安倍政権が誕生した以降、今は回復基調にあります。私は、販売量が減少したときでも諦めず、組合員と共に良質な製品作りに励んできました。そのため、星野村の生産組合では仲間意識が高まり、団結力が強くなっています。

山間僻地の星野村ですが、土壌条件に恵まれ、
標高500メートルの栽培圃場は夏場の昼に温度が上がらず、にわか雨が多く、緑化樹の生産に適していることから、今後も良質な植木の生産に励もうと思っています。

大輪、八重のフリンジ咲き、F1品種の「コサージュ・シリーズ」が人気商品に

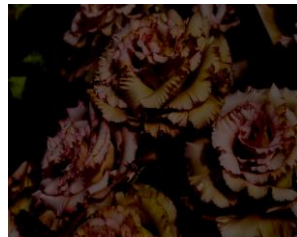
生産者は1枝1蕾仕立てを条件とした会に加入

♀ **中曽根健**：北は長野市、南は上田市に挟まれ、千曲川が中央を流れる長野県千曲市は、戸倉上山田温泉、江戸時代に善光寺街道最大の宿場町だった稲荷山宿、姥捨て伝説が残る月の名所でもある冠着山(別名姥捨山)等を有する交通至便な地域です。その千曲市で、リシアンサス(これは旧学名で、正しくはユーストマ、和名はトルコギキョウ)を生産している株式会社ナカソネリシアンサスの中曽根健です。

長野県は、リシアンサスの出荷量が日本一で、私の住む力石地区は昭和20年代から栽培に取り組む日本最古のリシアンサスの産地です。私は南九州大学園芸学部を卒業し、24歳で父の跡を継いでリシアンサスの生産を始めると同時に、育種にも取り組み始めました。大学では、ニガウリを栽培しただけで育種の勉強はしていませんでしたが、リシアンサスは、元々生産者育種が主体で、私の地区でも農家ごとに育種と採種を行っていたので、私も自然に育種を行うようになりました。私が20歳の頃、種苗メーカーのリシアンサス育種が盛んになり、我が家に来たブリーダーと会話する中で育種の知識を身に付けることができましたと思っています。

恵まれていたのは、父が育ててきた花を育種資源として豊富に使えたことです。それらを用いて、こ

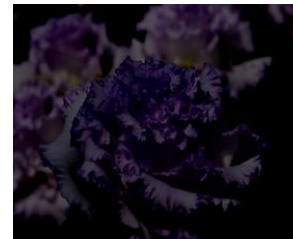
れまでになかった色などを求めて、交配を続けてきました。交配を行うといろいろな色彩や形態の表現などが出てくるので、試験に3年、100%揃うまでに早くも6年、通常10年を要します。困ったことは、生産している中に貴重な突然変異の花が咲いたとき、変わった色が嫌いな父がすぐに切ってしまうなど、家族との葛藤があったことです。そのような中で、大輪、八重でフリンジ咲きの3色の品種を育成し、平成18年に「コサージュ」の商標を登録したサカタのタネから売り出すことができました。コサージュ・シリーズ



コサージュ・アンティークピンク



コサージュ・ジョーカー



コサージュ・ラベンダー

のコンセプトの「花びらのフリルが繊細で柔らかい雰囲気を持ち、大振りでも八重咲ならではの華やかさがあり、花首が硬く垂れないで花持ちが良い」等が評価されて人気商品になるとともに、「コサージュ・グリーン」がジャパンフラワーセレクション2007~2008年に切り花部門でグランプリ、「コサージュ・ラベンダー」と「コサージュ・アンティークピンク」が共に IFEX2015と2016に切り花部門でグランプリ等、多くの賞をいただくことができました。販売が軌道に乗ると、少量の種子を自家用で扱っていたときと違い、種子を大量に扱うようになり、採種、乾燥、精選の失敗で発芽率が低下することなどで苦労しました。

コサージュ・シリーズの種子は、コサージュ会という生産者の会の会員にのみ販売し、生産してもらっています。現在、北海道から沖縄県まで約170人の会員がいて、市場や会員からの紹介や自己推薦で毎年増え続けています。生産した種子は、生産者の指定した地域の種苗店に販売してもらっています。トルコギキョウの八重品種は、一般的に1枝に蕾を2つつける仕立てが取られています。しかし、コサージュ会では花1輪に養分を集中させて、大きな花を下垂させず、長持ちさせるために1枝に1蕾だけをつける仕立てとし、それを守ることを会員となる条件としています。コサージュ・シリーズを売り出す前の平成17年頃までは、新品種が発売されても高価格で販売でき

るのは初年度だけで、次の年には品質の悪い品物が溢れてしまい、価格の暴落が繰り返されていて、市場や生産者からも高品質で高単価の商品が望まれていました。私は生産者でもあるので、自分の品種の市場価格を暴落させたくないの、生産者を選んで会員制にすることにしました。また、販売する花の出荷規格については、当初産地ごとに自分たちに都合の良い規格になっていました。そのことが市場から「大きさや長さが曖昧になっている、季節ごとに品質に振れがあり売りにくい」といった意見が出たことから、コサージュ・シリーズでは主な生花市場の担当者に一律の出荷規格を決めてもらうようにしています。

私の持っている育種のイメージは、その植物が本来持っている、事前の状態では決して発揮できない特性を、一瞬だけ目に見えるように発現させることです。私はF1育種をしているので、結果を想像して交配していますが、想像していた花が咲くのもうれいのですが、ときどき私のイメージ外の品種表現が出てくることがあり、そこが育種の面白さであり、楽しさだと感じています。

これまで、「育種は捨てることだ」と先輩の育種家から言われていましたが、私も過去の品種を捨てられず、品種がどんどん増えて農場が植物園のようになっていました。育種に使える面積には限りがあるので、それでは育種のスピードが落ちてしまいます。必要な形質以外のものを思い切って捨てると、残された品種から新しい表現が出てきてスピードが上がることを学びました。育種は、元々うまくいく確率の低い仕事なので、うまくいかなかったことを失敗とは考えていません。私も毎年数百のかけ合わせをしていますが、そこから2〜3品種が世に出たら幸せだと思って、育種に取り組んでいます。また、夏場の育種期間以外は切り花生産者なので、頭を切り替えて栽培技術のことを考えています。

今後も、多くの方々に感動を与えるリシアンサスの新品種を開発していきたいです。遠い将来になるかもしれませんが、複雑な色表現でもあるコンポーズ・ブルーの花色の品種を作り出したいと願っています。



🌸🌸🌸 活動暦 🌸🌸🌸

8/9 かわら版「育種の波動」第8号発行

9/18 新・情報7 days ニュースキャスターに金澤相談役、竹下選考委員が出演

🌸 当面の活動予定 🌸

10/20 15時～ 育種セミナー（オンライン開催）

異なる熟期のスモモ新品種の育成・販売による
地域農業活性化の取組み

講師 渡辺誠一



📣 伝言板 📣

📄 当かわら版は昨年2月10日第1号を発行して以来、今回で10号の発行を迎えることができました。以前に発行していた機関紙「種と育種」は年に1度の発行でしたが、このかわら版「育種の波動」は、不定期ですが、ほぼ2か月に1度の発行することができました。特に会員の育種の取組みを掲載していることはこの新聞の大きな特徴です。この記事について、「思うようにいかないことも多い中で、長年をかけてモチベーションを失わずに新品種を誕生させる皆さんの努力を知ることができる」「育種家の集まりの会にふさわしい内容だ」という声もいただき、それらを励みとしながら、10回の発行にこぎつけることができました。御協力いただいた皆様に改めて感謝を申し上げます。第1号の「伝言板」には、「会員の皆さんが全国に散在している、なかなか会員同士の連携が取れない中、会員が一体感を持って品種育成に取り組む一助となることを願って新聞を発行することにしました」と発行の目的が書かれていますが、その目的にわずかで応えることができているのであれば、それほどうれしいことはありません。今後もこのかわら版を皆さんが心

待ちにし、
皆さんに共感や感動等を与えられるような
紙面と
なるよう努めてまいりますので、情報の収
集等に
御協力をよろしくお願いいたします。

 今年は、8月中～下旬に西日本で大雨とな
った

ことで、8月の降水量は過去の記録を更新
し、9月
上～中旬は記録的な日照不足となりました。
このよう
な中、会員の皆様も作物生産に大変に苦勞さ
れて

いることと思います。このような中、これか
らの農業を

切り開くものとして金澤相談役、竹下選考委
員も出

演して、TBS テレビの新・情報7 days ニュ
ースキャス

ターで品種改良が取り上げられ、報道されま
した。

7月下旬には、石川県育成のブドウ品種「ル
ビーロ

マン」が韓国で生産されていたニュースもあ
りました

が、これらの報道は種苗法改正が行われ、こ
れまで

あまり注目されることのなかった育種にマス
コミが

ようやく目を向けてきた証だと思えます。育
種家で

ある我々は、このような変化を朗報ととら
え、新品種

の開発、普及に更に励んでいこうではありま
せんか。

 今号の「わたしの育種の奮闘記」では、
イチゴ

の水野さん、アセビの山口さん、リシアン
サスの中

曾根さんと育種作物の異なる3人の取り組
みを紹

介しました。水野さんはJAの営農指導員か
ら頼ま

れたこと、山口さんは生産したアセビが
「生育が悪

い」等とお客である工事関係者から言われ
るように

なったこと、中曾根さんは地域にリシアン
サスの個

人育種家が多かったことと、それぞれ育種

を始めた
きっかけは異なりますが、対象作物に強い
愛着を持
ち、育種、生産、販売に真剣に取り組まれ
ている姿

に感銘しましたが、皆様はいかがでした
でしょうか。

このかわら版についての意見、情報提供、感想、
問合せ先は次のとおりです。

全国新品種育成者の会事務局

岩澤 弘道

090-4059-1096

Fax 03-3691-2818

Eメール iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com